

---

# ロストヴィレッジ ～失われた村～

雨宮 美雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロストヴィレッジ ～失われた村～

### 【Nコード】

N8918L

### 【作者名】

雨宮 美雨

### 【あらすじ】

エルフのリリアンとその弟ラウザルクと妖精ラターンが、いろいろな世界を旅していくうちに、ある村にたどり着く、が、次の日起きてみるとその村は消えていた

リリアンとラウザルク、ラターンがいろいろな人と出会いなぜ村が消えてしまったのか探して行くお話です。

温かい眼差しで、見守って下さい。お願いします。

## 第1章 旅の幕開け

### 第1章 旅の幕開け

「リリアン姫お待ち下さい！」

ここは、エルフの国 ザリータ そのこの姫の名は、リリアン・ネイリーン。

少しくせつ毛の腰まで、伸びたきれいな金髪にグリーンアイ。この目は、母譲りだ。

エルフらしい、とんつがた耳には、無数のピアス。

そのなかで、ひときわ輝いている翡翠のピアスは代々王家にうけつがれている物だ。リリアンの手の甲には、複雑な魔法陣が生まれながらにして、刻まれている。

まだ、彼女はその魔法陣の意味に気がついては、いない。

「イヤー！ 勉強には、もううんざりなの！！」

「お待ち下さいリリアン姫！」

角を、曲がるとそこには少しふわふわとした金髪に不釣り合いなつり目のブルーアイこの目は、父譲りだ。

とんがつた耳には、金色のピアス、彼は生まれた時武器の妖精から柄の真ん中に大きなサファイアが埋め込まれている剣を、もらっている。

「またやってんのか、リリアン」

彼の名は、ラウザルク・ネイリーン。リリアンの弟だ。

「いいでしょ、別に。私は、外の世界をしりたいの。いつか、外の世界を旅してみたいの！」

「ダメ、です！！」

「いいじゃない。ラターン。」

ラターンは、武器の妖精こと、リリアンとラウザルクの教育係だ。10cmの身長、後ろに束ねられた髪は、茶色に光っている。黄色の、小さな布を服のようにまとっている。

「そうだ！お母様に、お許しをもらえばいいのよ！そしたら文句ないでしょ。」

リリアンは、「そうよ。なんで早く気がつかなかったのかしら。」と、言っている。

「まあ、やってみたら、いいでしょう。」  
と、ラターン。

ドタドタ、バタン！！

「リリアン。いつも、おしとやかにと言っているでしょう。」  
彼女の名は、フリーザ・ネイリオン。

リリアンとラウザルクの母だ。

金髪のくせつ毛のショートカットにグリーンアイに、とんがった耳にはピンクのピアスがある。

二人の父親は、ラウザルクが生まれてすぐに亡くなった。

「ごめんなさい、お母様。今度は、気をつけるわ。あのね、少し相談があるの。聞いて下さる？」

「いいわよ、リリアン話してごらんなさい。」

「私、外の世界を旅してみたいの。いいでしょう。」

「そうね、いつもいってるものね……。まあ、いいでしょう。」

それは、とてもあっさりと決まった。リリアン自身、話についていけないくらい。

「……ヤッター！！ありがとう、お母様。」  
スツと、ラウザルクが入ってくる。

「お母様。おそれながら、リリアン一人で行かせるのは、心配ゆえ僕とラターンも、一緒に同行させて頂きたいです。」

ラウザルクはリリアンに向かってウインクをしてみせた。リリアンは、とても心強くなった。

「そうね、ラウザルクとラターンが一緒なら安心ね。ラターン、二人をよろしくね。」

「はい、おまかせ下さい」

リリアンは、この後の悲しい現実を知るよしもなかった・

・  
・  
・

## 第2章 ビックマウンテンで・・・

### 第2章 ビックマウンテンで・・・

「ここが、巨人の住む町・・・ビックマウンテンね・・・。」  
そう言ったりリアンは身震いしていた。

なぜかという、ザリータを出てはじめてきた所というのもあるが、  
なによりすべてが大きかったのだ・・・。

リアンは168cmの身長だが、巨人は3mをゆうに超えている。  
そんな環境だ。

「リアン・・・ここは・・・だめだ・・・。」

「そうです！踏まれてもしたら・・・ああ・・・。」

「ラウザルクもラターンも気にしすぎ！行くよー！ー！！」

「だめだ・・・聞いてない・・・。」

「ああああー！ー！どいてー！ー！ー！ー！！」

ドシンツッ

あたってきたのは、巨人にしては小さく、人にしては大きい男の子  
だった。

「あなたは・・・？」

「僕は巨人のグラータ。君たちは・・・、エルフと妖精だね。」

「よろしく、グラータ。私は、リアン。こっちの二人は、ラウザ  
ルクとラターンよ。」

二人は、グラータにあいさつをした。

『よろしく。』

「あついたぞチビのグラータ！こっちだ！」

「見つかった！どうしよう・・・。又・・・いじめられる・・・。」

「ごめん3人共・・・逃げなきゃ・・・。」  
「そうして、グラータは行ってしまった。」

『嵐がくるぞー！』

その知らせがきたのは、夜中の事だった。

ドガーーンバリバリツツ

『みんなー！講堂に集まれー！この嵐は大きいぞー！！』  
「リリアンたち一緒に講堂まで行こう。」

「ええ。」

「そうだな。」

「早く私が飛ばされないうちに！」  
バシャツバシャツ

「ここだよ。」

ドタドタドタツツ

『お前は、外にいるよ。グラータ。』

「うっ・・・うん。」

「そんな！危ないよっ！」

「いいんだリリアン。」

『だれかー！ー！うちの子を助けてー！！』

向こうから女の巨人の悲鳴が聞こえてくる。

講堂の中の人には、聞こえないようでなんの反応もない。

「グラータいきましよう。あなたが、その子を助けてあなたをいじめる人に認めさせるの。」

「僕、頑張る！！」

「助けに来ました。僕どうすれば・・・？」

「ありがとう。きっとこれはあなたにしか出来ないわ！この小さな

穴の向こうにいるみたいなの！たのんだわ！グラータ。」

グラータは、なんなくやってみせ、その女の人にとても感謝された。小さいからこそできたことだ。

そうして嵐も去りグラータをいじめていたリーダーに

『ごめんな、グラータ。もう、二度といじめたりしないよ。』

そうして、リリアンの言葉で勇気をもらったグラータは、みんなの人気者となりリリアンたちは、ビックマウンテンをあとにした。

### 第3章 失われた村

#### 第3章 失われた村

「リリアン・・・ここには入らない方が良さそう思うぞ・・・。」

「そうです！絶対に入らない方が良さそうです！」「なに言ってるの！こういう所にこそロマンが、お宝があるのよ！」

そこは、誰もいないと言っても過言ではない、霧に包まれた薄暗い村だった。

「とりあえず今日はご飯を食べて寝ましょう。明日この村を探索して、人を探しましょう。」

リリアンたちは、自分たちで自炊をし、誰も住んでいない家に泊まった。

翌朝。

「やっぱりなんにもないわね・・・。」

リリアンは残念そうにつぶやいた。

「わかったなら、他の村に行こーぜ。俺この村嫌いだ・・・。」

ラウザルクは、ふるえながら言った。

「そうね。なんにもないのにいてもつまらないし・・・いきましょ。」

「

ファッ

「急に暗くなつたわね・・・。」

スッ

リリアンは顔を青くした。

そして、事件は起こってしまった。

振り返ると村は、丸々消えて無なっていた・・・。

「なんで・・・？」

リリアンの悲しい声がこだまし、向こうの山が霧も無く見えていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8918/>

---

ロストヴィレッジ ~失われた村~

2011年10月7日07時40分発行